

令和元年6月26日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01165

研究課題名(和文) 訪日外国人旅行者の増加と国境地域の変容

研究課題名(英文) The increase of foreign visitors and changes of border regions in Japan

研究代表者

高木 彰彦 (Takagi, Akihiko)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：90197054

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主に以下の3つの課題を検討した。20世紀末から進展著しい境界研究の成果の涉猟と研究動向の把握、日本における訪日旅行者及び日本人海外旅行者の地域的特徴とその変化の把握、国境地域における外国人旅行者の急増と地域社会の変容に関する現地調査と実態の解明。これらについては、「境界の橋渡し」論や「ポジショナリティの変化」というアプローチが有効である。については、九州・沖縄地方の国境離島において船を利用した訪日外国人旅行者が急増していた。そこで、長崎県対馬市、沖縄県石垣市、与那国町などで現地調査を実施し、これらの地域が、国土の縁辺部から東アジアの国境地域へと変容しつつあると理解できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の地理学においては、国境離島を国土の縁辺部として捉えてきた。インバウンドに揺れる離島といった個別の事例研究はあっても、これら離島を国境地域として捉え、アジアにおけるポジショナリティの変化の事例として取り上げた研究は皆無であった。その意味で、こうした点に着目した本研究の学術的意義は高い。

また、ポジショナリティの変化という観点から、国境の向こう側にある外国を念頭に置くという研究視点は、今後の国境離島振興という点においても社会的意義は高い。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the following three topics: 1. recent trends of the border studies, 2. changes in the number of foreign visitors to Japan and Japanese visitors abroad, 3. field studies to clarify changes of border regions in Japan with the rapid increase of foreign visitors, for example, Tsushima island, Ishigaki island, Yonaguni island.

As a result of the study, it has shown that Japan has witnessed the rapid increase of foreign visitors in her border islands coming directly from East Asian countries by ships. This means that the positionality of border regions changed from the marginal areas of the national territory to the cross-border and cross-cultural regions in East Asia.

研究分野：Political geography

キーワード：border regions positionality Foreign visitors Ishigaki island Yonaguni island Tsushima island

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19, CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、グローバル化の進展や旧ソ連の崩壊・EUの統合進展などにより、新たな国境が引かれたり国境の通過しやすさが変化したりするなど、国境や境界に対する関心が高まり、境界研究(ボーダースタディーズ)が興隆してきた。周囲を海に囲まれた日本では、航空機の国際線に搭乗する際の出入国審査に見られるように、海外に出かける時に国境線を越えることが意識されるのは希だった。しかしながら、21世紀に入って、韓国・中国・台湾などから海路により直接日本に入国する外国人観光客が急増するようになったことから、人々の交流という意味では、これまで国土の縁辺部としてのみ位置づけられてきた離島地域が、国境地域として注目されるとともに、こうした訪日旅行者の増加に伴ってこれら国境地域の変容への関心も高まってきた。

2. 研究の目的

上記の研究動向や背景を踏まえて、本研究では、世界における境界研究の動向を渉猟するとともに、対馬や石垣など日本の国境地域における訪日外国人旅行者の急増の現状を把握し、その問題点や今後の課題について検討することにより、日本の地理学における境界研究の活性化に資することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、主に以下の3つの課題を検討した。

20世紀末から進展著しい境界研究の成果の渉猟と研究動向の把握。

日本における訪日旅行者及び日本人海外旅行者の地域的特徴とその変化の把握。

国境地域における外国人旅行者の急増と地域社会の変容に関する現地調査と実態の解明。

4. 研究成果

：境界研究の研究動向については、地理学のみならず文化人類学や国際政治学など多様な学問分野において研究が進展してきている。1976年に米国で「境界地域研究学会(Association for Borderlands Studies, ABS)」という学会が設立されたほか、境界問題に携わる研究者・実務者の国際ネットワークである「移行期の境界地域」(Border Regions in Transition, BRIT)も1994年に第1回会合が開かれた。日本では、北海道大学におけるグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成 - スラブ・ユーラシアと世界」(2009~2013年度)の活動が大きい。このプログラムによって、境界地域研究学会日本支部、境界地域自治体と研究機関を結ぶ「境界地域研究ネットワーク」(Japan International Border Studies Network, JIBSN)、国境研究に関心を持つ研究者や実務者によるNPO法人「国境地域研究センター」(Japan Center for Borderlands Studies, JCBS)などの組織が設立されるとともに、国境地域および境界研究に関するさまざまな活動を展開してきた(岩下2016)。

上述の世界と日本における境界研究の展開に加えて、以下では近年の代表的な研究として、Popescu (2012)とKortelainen & Rannikko (2015)について述べる。Popescu (2012)はこれまでの境界が物理的なものと位置づけられてきたのに対して、20世紀後半からの境界は社会構造的なものへと性格が変化したことを指摘するとともに、今後は、グローバルな戦略としての越境協力を依拠した「境界の橋渡し」が必要であることを強調する。

また、Kortelainen & Rannikko (2015)は、経済地理学の資源周辺の議論で指摘されてきた「ポジショナリティ」を国境地域の資源経済に適用することを提唱した。以下では、において、こうしたグローバル戦略としての越境協力とポジショナリティ・シフト概念に依拠しながら、日本の国境地域の事例研究について述べる。

：日本における訪日旅行者及び日本人海外旅行者の地域的特徴について述べると、以下のとおりである。日本では、1971年に日本人出国者数が外国人入国者数を上回って以来、40年以上にわたって日本人出国者数の多い状態が続いてきた。しかし、国土交通省(観光庁)が2003年に開始した「ビジッ

表1 港別にみた外国人入国者数(2007年・2017年)

順位	2007年		2017年		増加率
	港	人数(人)	港	人数(人)	
1	成田空港	4,375,849	成田空港	7,639,125	74.6%
2	関西空港	1,647,188	関西空港	7,159,996	334.7%
3	中部空港	596,392	羽田空港	3,745,577	748.4%
4	羽田空港	441,477	福岡空港	2,205,616	409.7%
5	福岡空港	432,750	那覇空港	1,631,063	1852.4%
6	新千歳空港	300,549	新千歳空港	1,492,723	396.7%
7	博多港	287,220	中部空港	1,359,385	127.9%
8	下関港	105,859	博多港	776,985	170.5%
9	大阪港	97,569	比田勝港	258,599	918.2%
10	那覇空港	83,542	北九州空港	126,211	1813.4%
	全国	9,152,186	全国	29,878,081	226.5%
1	博多港	287,220	博多港	776,985	170.5%
2	下関港	105,859	長崎港	599,171	2347.5%
3	大阪港	97,569	那覇港	377,951	1560.0%
4	釧原港	40,681	比田勝港	258,599	918.2%
5	鹿児島港	25,660	八代港	214,640	-
6	比田勝港	25,397	下関港	165,829	56.7%
7	長崎港	24,481	鹿児島港	119,513	365.8%
8	石垣港	23,850	石垣港	109,082	357.4%
9	那覇港	22,768	釧原港	99,789	145.3%
10	伏木富山港	9,445	平良港	81,070	736900.0%
	全国	666,266	全国	3,190,445	478.9%

* 上表は全港の順位、下表は港湾のみの順位。2017年の数値は、外国人入国者数に船舶観光上陸数を加えた。八代港の増加率が空欄なのは2007年の数値がゼロのため。

出典：法務省の出入国管理統計より筆者作成。

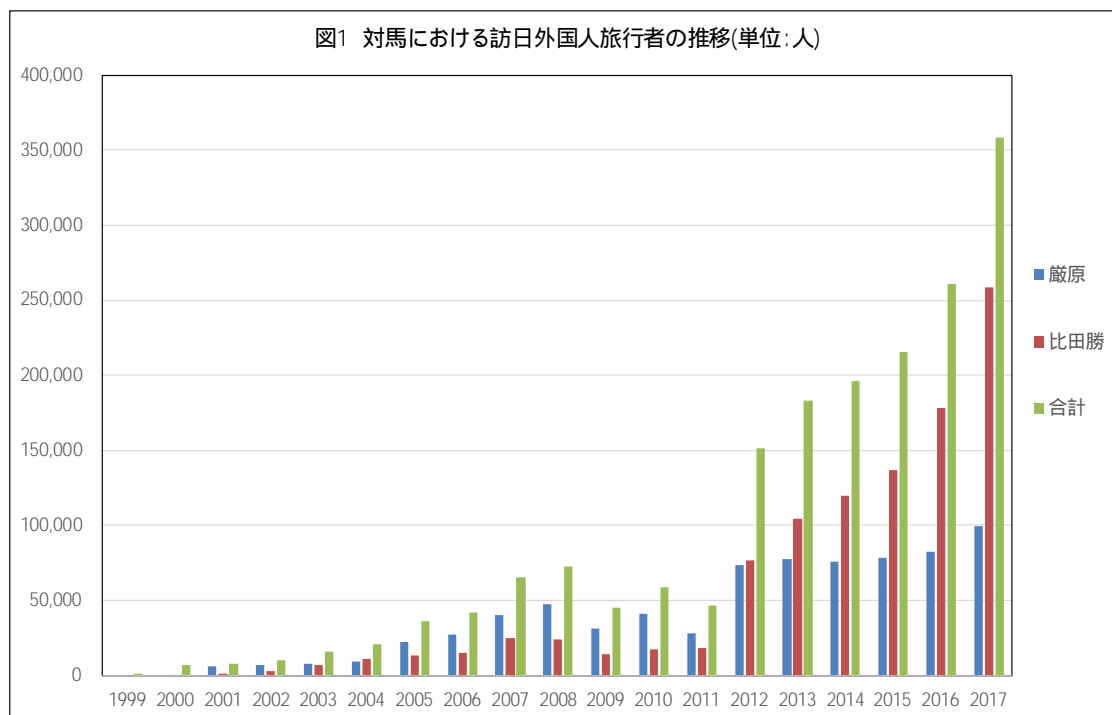
ト・ジャパン・キャンペーン」(VJC)に加え、アベノミクスによる円安やビザの緩和などが追い風となって外国人入国者数が急増し、2013年にはVJCが目標とした一千万人を超え、2015年には日本人出国者数をも上回ったのである。最新の2017年の数値を見ると、外国人入国者数が2,869万人と、日本人出国者数1,789万人を大きく上回っている。

表1は、法務省の出入国管理統計から外国人入国者数を港別に示したものである。最新の2017年の数値を見ると、成田、関西、羽田など、国内ハブ空港の数値が大きいことがわかる。この10年間で外国人入国者数は3倍以上に増加したが、羽田、福岡、関西、那覇などの伸びがとくに大きい。こうした空港における増加の大半はアジア各地からのLCC便の増加によるものである。その一方で、博多港、比田勝港、北九州空港と、九州内の港がベストテン入りしているのが注目される。これらの例からわかるように、九州・沖縄地域の港は空港だけでなく海港も含まれているのが他地域とは異なる点で、しかも、10年間の増加率は極めて高いのである。表1の下表は海港のみを抽出したものだが、下関も含めると、2017年には九州・沖縄の海港が上位を独占している。表には示していないが、2007年の九州・沖縄地区の外国人入国者の合計は1,059,632人で、全国の11.6%を占めていた。それが、2017年には7,250,648人(24.3%)となり、この10年間で7倍近くにもなっているのである。

こうした訪日外客の増加をもたらしている最大の要因はクルーズ船によるものだ。国土交通省(観光庁)のクルーズ船寄港回数(<http://www.mlit.go.jp/common/001222310.pdf>, http://www.mlit.go.jp/report/press/kaiji02_hh_000236.html 閲覧日:2019年6月10日)を見ると、2010年には929(うち日本船591,外国船338)回だったものが、2017年には2,765(日本船751,外国船2,014)回と過去最多を更新し、この8年間で3倍ほどに増えた。増加の要因は外国船であり、その多くは中国・台湾など東アジア諸国から来ている。2017年の寄港回数を見ると、1:博多326,2:長崎267,3:那覇224,4:横浜178,5:石垣132,6:平良130,7:神戸117,8:鹿児島108,9:佐世保84,10:八代66,の順であり、神戸を除くと全て九州・沖縄地区の港である。表1の下表の数値も大半がクルーズ船のものである。なぜ九州・沖縄地域の港への寄港回数が多いのだろうか。それは東アジア地域からのポジショナリティによるところが大きい。クルーズ船といえば豪華客船による世界一周旅行を思い浮かべる人も多いと思うが、東アジア諸国からのクルーズ船は、2,3泊程度のクルーズが多く、出発地である上海、天津、基隆、香港などからの距離を考慮すると、九州・沖縄は最適の寄港地となるからだ。以上のように、九州・沖縄地域の港において東アジア諸国からの訪日外国人旅行者が急増していることがわかる。

：事例研究については、現在、論文を執筆中である対馬市の事例(-1)と与那国町の事例(-2)について述べ、すでに論文にまとめた石垣市の事例は割愛する。

-1 - 対馬市の事例。



2004年に6町が合併して対馬市が誕生したが、それ以前から対馬では、旧6町がブサン市のヨンド区との姉妹島締結(1986)をし、三大祭りと言われる厳原港祭り(対馬アリラン祭1988)、対馬ちんぐ音楽祭(1996)、国境マラソンIN対馬(1997)が開催されるなど、韓国とのさまざまな交流事業が行われてきた。また、1989年には「あをしお」が上対馬・ブサン間に就航、1991年にはJR九州が「ビートル」をブサン・博多間に就航させ、一部が対馬にも寄港するように

なるなど、国際定期航路の開設が徐々に進められてきた。1997年には厳原港、1999年には比田勝港に国際ターミナルが開設され、同年に韓国の大亜海運が「シーフラワー」を就航させると、韓国からの観光客は飛躍的に増大した（図1）。

こうした韓国人観光客の増加に伴い、ホテルや飲食店は潤ったものの、言葉の問題や習慣やマナーの違いによる文化摩擦などが問題視されるようになったし、韓国資本のホテルや飲食店の進出による住民との摩擦も指摘されるようになった。また、海上自衛隊基地の隣接地にリゾートホテルが建てられると、一部の議員やジャーナリストにより「対馬が韓国に乗っ取られる」といった訴えもなされるようになった。とはいえ、観光客数は2000年代には順調に増加し、島民の数を越えるほどの韓国人観光客が訪れるようになった。2011年までは、島内最大の集落で宗氏の城下町でもあり観光資源に恵まれた厳原町が韓国人観光の中心であり、厳原港から対馬に入る韓国人が多かった（図1）。2017年には島内一の高層ビル（14階建て）もオープンし、免税店も新たに開業した。

ところが、2011年の東日本大震災の影響は遠く離れた対馬にも大きな影響を及ぼし、大亜海運が定期航路を廃止してしまい、同年の観光客数は5万人を割ってしまった。このため、危機感をいだいた地元住民が中心となって、ビートルを寄港するようJR九州に陳情した。その結果、ビートルとコピーが比田勝に寄港するようになると、一旦は定期航路を廃止した大亜海運も復活し、2012年からは3社体制で高速船が運航されることとなった。

この結果、2012年以降は比田勝港を中心に客足が伸び、近年では30万人を越える韓国人が対馬を訪れるようになってきている。今や比田勝港は、日本で博多港に次いで入国者数の多い海港となっている（表1）。比田勝港はプサン港から50kmほどの距離にあり、高速船で1時間ほどで到着する。島内の中心集落厳原や対馬空港に行くよりも近いのだ。

プサンから来る客は日帰り客も多い。若者達はコンビニやスーパーで韓国にはない日本のカップ麺や菓子類などを購入して帰って行く。今や比田勝地区はブームに沸いているようだ。これまでフェリー乗り場が中心であり、国際線ターミナルは港の隅にこぢんまりとしていたけれど、国内線ターミナルが港の南側にある対岸に移ったため、これまで比田勝港のあった場所は国際線のみとなった。港付近には2018年夏に 테마ドホテルが開業し、さらに2019年には三宇田浜に東横インが開業予定だ。飲食店に入ると、近所のおばちゃんたちが、韓国人観光客相手に「とんちゃん」などの郷土料理の調理に追われていた。「こんな何もない所のどこが良いかね～」とぼやきながらも、彼女たちは忙しそうに働いていた。「そうなのだ、何もない所が良いのだ」人口3百万人を越える大都会プサンから船でわずか1時間の所に手つかずの自然が残っている。韓国人の人々は、そうした自然を求めて対馬にやって来るのだ。写真1は日本の渚百選にも選ばれた「三宇田浜」である。夏はもちろんのこと、真冬でもこの美しい浜を訪れる人は多い。



写真1 冬でも訪れる人の多い三宇田浜

対馬の人々の多くは日本よりも韓国を向いている。あるホテルの経営者は「ここは半分韓国ですから」と私に語った。上対馬支所では、語学研修のために職員を韓国に派遣したが、この職員は堪能な韓国語を活かして、毎日、インターネットやSNSをチェックし、対馬が韓国人にどのように評価されているかを知ろうとしている。そして、そうした評判になっているトピックスを素早く取り込んで、観光客のニーズに応えようとしている。ハンバーガーショップの若い日本人店員と韓国人の若いカップルの客は、互いに言葉が分からないにもかかわらず、スマホの翻訳機能を介して注文のコミュニケーションをいとも簡単にやってのけていた。また、対馬高校には2003年に「国際交流コース」が設置されたが、これは通常の科とは異なり、「離島留学制度」が適用されて島外・県外からも入学できる。ここでは韓国語や韓国文化を学ぶことができるため、将来は韓国の大学に進学する生徒もいるし、生徒たちは国際交流や韓国人観光客のおもてなしにも一役買っている。

ところで、北大の研究グループはグローバルCOEのみならず、「課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業」にも採択された。このプログラムで手がけたのは「ボーダーツーリズム」だった。NPO法人「ボーダーツーリズム推進協議会」を立ち上げ、自治体と旅行業者および研究者とが協働して「国境観光」をプロデュースしたのだ。2015年3月の対馬・プサンのモニターツアーを皮切りに八重山、稚内・サハリンなど、日本の国境地域だけでなく、中露国境もコースに仕立てて、新たな観光の流れを創ろうとしている。これまで離島振興法により手厚く整備されたことから、国境離島は国土の縁辺部にありながらもインフラはそれなりに整備されている。このように整備された道路や港湾施設の有効利用にもなり、国内中核地域からの新たな観光客の掘り起こしにもつながるボーダーツアーは、新しいタイプのツーリズムとして将

来性がある。こうした試みが展開すれば、国境離島地域は国土の縁辺部にありながらも、その先が外国につながるという、これまでになかった新たな空間認識と旅行の行動様式をもたらすに違いない。将来性のある魅力あふれた試みである。さらに、こうした流れに棹さず事業が2018年夏から走り始めた。「混乗便」である。JR九州の博多-プサン航路の一部の便を国内線としても利用できるというものだ。混乗便を利用すれば、博多港から比田勝港まで2時間で到達できる。比田勝からは対馬空港までも2時間程度かかることから、福岡との往復においては、利用客は大幅な時間の節約となる。

-2: 与那国町の事例。最終年度に沖縄県八重山郡与那国町で現地調査を実施した。与那国町は台湾との交流を積極的に進めてきた自治体であり、2012年に開かれたJIBSN設立プレ企画でも姉妹都市の花蓮との間にチャーター便を飛ばすという計画を町長がぶち上げ実現した。与那国町は、姉妹都市の締結、それに伴う高校生の派遣等、これまでも台湾との交流を独自に進めてきた。日本最西端の地であり、台湾まで80kmほどの位置に恵まれているにもかかわらず、台湾との間に定期便もなく、クルーズ船も寄港しないのは、人口わずか2千人、面積29平方キロという小規模性に原因があった。規模の経済が作用しないのだ。しかし、近年、海底ケーブルによって光ファイバーが整備されたため、これを有効利用するためのIT化事業が現在進められている。NTTドコモの社員が東京からやって来て、役場の職員とともに新たなアプリの開発事業を進めていた。加えて、「日本最西端の地」として小・中学校の教科書に載っているため、日本人の中での知名度は高く、最西端の地を訪れる国内観光客は増加基調にあるという。空港・港湾という



写真2 日本最西端の地・与那国町西崎

インフラも整っており、観光客の増加が見込まれば、観光業は軌道に乗ることだろう。この動きをボーダーツーリズムとして、日本・台湾の相互交流という流れに繋げていけば、最西端の地でもクロス・ボーダーツアー客で賑わう場所となることだろう。幸いなことに、静岡県に本拠を置くフジ・ドリーム・エアラインズ(FDA)航空が大都市地域から離島へのチャーター便就航に熱心だと言う。役場の担当者は、「JIBSN設立により国境離島という横の繋がりができたことは、地域活性化の取組の励みとなっている」と語ってくれた。グローバルCOEによる国境地域のネットワーク作りは、こういった点において着実に成果を生み出す流れを起こしつつある。与那国町はCOEによって中国語のできる専門研究員の派遣を受け入れた自治体でもある(舩田・ヤン 2015)。今や国境離島は「さいはての地」ではなく、クロス・ボーダーの場所として、行き止まりではなく「その先が見え、その先に行ける」場所になりつつある。

以上のように、本課題に従事した4年の間に、日本の国境離島を取り巻く環境は着実に変化している。周囲を海に囲まれた日本では、国境離島は国土の縁辺地域にほかならず、その先に国土がない「果ての地」と認識されていた。しかし、近年のアジア諸国における経済成長と日本政府によるビザの緩和などにより、これら東アジア諸国から船によってダイレクトに入り込む訪日外国人旅行者が急増するようになった。当初、こうした外国人の急増に伴い、言葉の問題や文化的習慣の違いによる摩擦などの問題もみられたが、外国からの旅行者は減ることなく増加し続けている。これら国境地域の離島は、もはや国土の縁辺部に位置する「果ての地」ではなく、国境線の向こう側を見据えた新たな視野のもとで「境界の橋渡し」を担うという方向性へと、その「ポジショナリティ」を変化させつつある。

文献:

岩下明裕(2016):『入門国境学 - 領土, 主権, イデオロギー』中央公論新社, 2016.
舩田佳弘, ファベネック・ヤン(2015)『「見えない壁」に阻まれて - 根室と与那国でボーダーを考える』国境地域研究センター。
Kortelainen, J. and Rannikko, P. (2015): Positionality switch: Remapping resource communities in Russian Borderlands, *Economic Geography*, 91, 59-82.
Popescu, G. (2012): *Bordering and ordering the twenty-first century: Understanding borders*, Rowman & Littlefield, U. K.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計10件)

高木彰彦(2019): 戦時下日本における国土計画と地政学, 史淵 156, 査読無, 49-82.
高木彰彦(2018): ポジショナリティ・シフトと九州経済のダイナミズム, 九州経済調査月報, 査読無, 32-34.

高木彰彦(2018): MIRAB 型経済とパラオ共和国, 地理 63-9, 査読無, 70-77.
高木彰彦(2018): 地政学と政治地理学の関係を読む, 地理 63-3, 査読無, 12-20.
高木彰彦(2017): 学界展望(2016年1月 - 12月) - 政治・社会 人文地理 69, 査読有, 217-212.
高木彰彦(2017): 地方創生の地理的含意, 史淵 154, 査読無, 123-146.
岩下明裕, 高木彰彦(2016): ボーダースタディーズへの招待 - 連載を始めるにあたって, 地理 61-4, 査読無, 68-74.
高木彰彦(2015): 訪日外国人旅行者の増加と国境地域の変容 - 石垣島の事例, 史淵 153, 査読無, 87-116.
高木彰彦(2015): 書架:『境界から世界を見る - ボーダースタディーズ入門』(A・C・ディーナー, J・ヘーガン著, 川久保文紀訳/岩下明裕解説), 地理 60-8, 査読無, 90.
高木彰彦(2015): 書架:『アホウドリを追った日本人 - 一攫千金の夢と南洋進出』(平岡昭利著), 地理 60-5, 査読無, 90.

[学会発表](計6件)

Akihiko Takagi, New Dynamics and Security in Border Regions in Japan, World Social Science Forum 2018, 2018.

高木彰彦, 地名標準化の現状と課題 - 地名委員会(仮称)の設置に向けて: 趣旨説明, 2016年日本地理学会春季学術大会, 2017.

Akihiko Takagi, New Dynamics of Border Regions in Asia: A Case of Ishigaki Island in Japan, International Forum on Frontiers of Political Geography: IGU Commission on Political Geography, Pre-Conference in Guangzhou 2016, 2016.

高木彰彦, 地方創生と経済地理学 - 趣旨説明, 経済地理学会大会, 2016.

Akihiko Takagi, Recent Increase of Foreign Visitors from East Asia in Japan, The 10th China-Japan-Korea Joint Conference on Geography, 2015.

Akihiko Takagi, Exceptionalism in Japanese Geopolitics, International Geographical Union Moscow Regional Conference, 2015.

[図書](計0件)

なし

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし